

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 5 月 30 日現在

機関番号：24403

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26350363

研究課題名(和文) 岩倉病院資料の分析に基づく精神医療史の研究

研究課題名(英文) Research on the History of Psychiatry in Japan based on historical materials of Iwakura Mental Hospital

研究代表者

中村 治 (Nakamura, Osamu)

大阪府立大学・人間社会システム科学研究科・教授

研究者番号：10189029

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：岩倉病院(1884年～1945年)は1920年に道府県立精神病院の代用精神病院に指定された。ところがその指定により、公費患者に対して行政から支払われるわずかな金で経営を成り立たせるため、石炭や朝鮮米を使って、岩倉のたきぎや米を使わなくなり、地元利益をもちたなくなった。

戦後、(新)岩倉病院(1952年～)の若手医師たちが1970年頃から開放医療を積極的に進めた時、岩倉地域の住民と病院の関係がこじれたが、その原因は代用精神病院の指定の頃から病院と地域の関係が互恵的でなくなったことにある。精神病に関することは、患者と医者・看護スタッフ間だけのことではなく、地域や地域住民も関わることである。

研究成果の概要(英文)：After Iwakura Mental Hospital was designated as a substitute for public mental hospitals, it had to receive mentally ill patients whose medical expenses were paid by the public. In order to run the hospital with small money paid by the public, it had to purchase staples such as coal and Korean rice which were cheaper than the firewood and rice from Iwakura. Though Iwakura Mental Hospital increased the number of patients after that, this increase in patients was not beneficial for Iwakura.

After around 1970, (New) Iwakura Mental Hospital actively introduced an open medical care system. Many patients who had been confined in the wards for a long time caused troubles in the towns. Residents in Iwakura strongly opposed this open medical care system. One of the reasons for this opposition was that the relation between Iwakura and the mental hospital had not been reciprocal. Reciprocity is important if mental hospitals want to have good relationship with the surrounding areas.

研究分野：精神医療史

キーワード：岩倉 大雲寺 保養所 家族的看護 金沢 奄美 ヘルル 南方熊楠

1. 研究開始当初の背景

京都北郊の岩倉は、後三条天皇の第三皇女が心の病を患った時、岩倉の大雲寺に参籠し、その井戸水を飲んでいたら、治ったという伝説を持ち、古くから精神障害者が集まるところとして有名であった。文献で確実になるだけでも、1765年から精神障害者が集まっていた。そして18世紀末からは、精神障害者を大雲寺前の茶屋や一般家庭で預かるるところとして有名になっていた。

明治時代になると、岩倉の地に京都府の要請によって明治17年(1884)に岩倉癲狂院が設立され(～1945年)、それは後に岩倉病院と改称し、大正9年(1920)には公立精神病院の代用精神病院に指定され、日本でも有数の精神科病院として成長していった。その岩倉病院は、昭和20年(1945)に陸軍によって接收され、終わったが、戦後、江戸時代からの茶屋の一つである岡山保養所が新・岩倉病院(1952年～)として、城守保養所が北山病院(1954年～)として再出発し、精神障害者を受け入れ続けた。それゆえ、岩倉はずいぶん長い間(文献で確実になるだけでも250年以上)精神障害者にかかわり続けてきたことになる。

その事實は、予備的な調査によってほぼ解明していたが、世界的に見てもまれなほど長く精神障害者の受け入れに岩倉がかかわってきた理由は何であったのか、岩倉における精神障害者受け入れの実態はどうであったのか、長い間、精神障害者の受け入れにかかわってきて住民に精神障害者に対する慣れができていたと思われるにもかかわらず、戦後、新・岩倉病院が開放医療を急激に進めた時、住民が反発を強めたのはなぜかといった問題の解明は進んでいなかった。

2. 研究の目的

岩倉病院の明治時代からの事務資料、会計資料、患者入退院簿、写真などが、最近、岩倉の旧家で大量に見つかった。それらを上記の疑問の解明に活かすのが本研究の目的である。

岩倉病院の資料が、当時の日本における精神医療の実情や精神病概念の変遷の解明のために重要であることは言うまでもない。しかしそれだけでなく、岩倉に江戸時代から存在していた宿屋(江戸時代の茶屋)や一般家庭における精神障害者の受け入れとの関係においても重要である。岩倉の宿屋や一般家庭における精神障害者の受け入れは、岩倉癲狂院(後の岩倉病院)が設立されてからは、それと無関係に存在していたわけではない。岩倉と同様、精神障害者を一般家庭で受け入れていたベルギーのヘルでは、ヘルに滞在したい患者はまず、ヘルの公立精神病院へ連れて行かれ、そこで病院入院か一般家庭での看護かどちらが適しているかを判断され、振り分けられるのであるが、岩倉でその役目を果たしていたのが岩倉病院であった

からである。

3. 研究の方法

(1) 病院ができる前において精神障害者が置かれていた状況を知るため、精神障害者が集まったことで知られている地、とりわけ奄美群島を訪ね、調査する。

(2) 精神病者保養所が岩倉と同じく多く存在した金沢とその近辺を訪ね、調査することにより、精神障害者の受け入れを可能にした条件、精神障害者の受け入れの実態について考察する。

(3) 保養所が保養所と呼ばれるようになった理由について調査する。

(4) 岩倉癲狂院(後の岩倉病院)の明治時代からの事務資料、会計資料、患者入退院簿、写真などを複写し、判読してデジタル化する。

(5) 岩倉病院は大正時代末から急激に大きくなったが、その理由を、岩倉病院資料を分析することによって考察する。

(6) 戦後、新・岩倉病院が開放医療を急激に進めた時、住民が反発を強めた理由について、聞き取り調査を進める。

4. 研究成果

(1) 奄美群島では、昭和29年(1954)12月まで、私宅監置が公認されており、昭和34年(1959)の奄美病院の開院まで、精神科の病院がなかったため、病院ができる前における精神障害者の看護について知っている人がまだわずかとはいえおられる。奄美群島では、患者は普段は監置されず、周りの人に遠巻きに見守られながら暮らし、迷惑をかけるようになると、監置室に入れられていた。精神科の病院がなかった時代、おそらく日本のどこでもそのような状況が見られたのであろう。家族が精神病を発症すると、家族としては、自分の身内が病気になるのを見るのは辛く、監置室に入れるのもかわいそうなので、治療できるものなら治療したいと、治療で有名な所に連れて行っていったようである。そういう場所は全国にいくつもあった。社寺や温泉や海が多く、岩倉もそのうちの一つであった。

(2) そのような多くの地のうち、岩倉が精神障害者受け入れ地として特に有名になっていったのはなぜか。岩倉と同じく精神病者保養所が多くあった金沢とその近辺を調査すると、

地元の米、野菜、たきぎのような産物を患者に商品として消費してもらえ、

看護、料理、洗濯などの仕事を患者がつくり出してくれる。

農作業や洗濯などの手伝いをしてくれる患者もいる。

というようなことが岩倉と金沢に共通していることがわかった。

精神病者保養所は、病院ではなかったため、当時の精神科の病院で行われていたような治療はしなかった。普段は、保養所内で患者

を静養させるほか、患者に保養所近辺を散歩させることもあり、作業をすることができる患者には、農作業、水汲み、洗濯、縄ないなどを手伝ってもらうこともあった。患者が興奮する時は、患者をなだめすかし、それでもだめな場合は、患者に保護衣を着せるとか、患者を布団巻きにして、保護室に入れ、患者が鎮まるのを待った。精神病者保養所は、患者を治すことをめざしたのではなく、保養所周辺の地域社会において患者に地域住民と何とか一緒に暮らしてもらうことをめざした。少なくとも保養所内において保養所の家族や看護人と何とか暮らしてもらうことをめざした。三食付の「旅館・下宿」であった。

(3) 保養所では、朝6時に患者を起こしてラジオ体操をさせ、昼間は決して眠らせず、夜は8時に就寝させるというような軍隊式の規則正しい生活を送らせた。そのようなところが「保養所」と呼ばれたのは、当時の日本において、身体を鍛え健康であることが国民に求められていたことと関係していると思われる。

病気は個人的な出来事であるが、伝染病ともなれば周囲を巻き込むことになる。看病や介護に家族が日々振り回されるようになれば、社会的労働力の損失だけでなく、救済や保護に要する費用が大きくなる。富国強兵をめざす政府は、伝染病がもたらす社会機能や社会秩序の不全、日常的な病がもたらす労働能力の低下を恐れ、病気を「自分の不幸」ととどめず、「一家の難儀」、「国家の損失」と規定し、伝染病の防止につとめた。明治時代末期の日本では、伝染病の主役が、急性伝染病であるコレラから慢性伝染病である結核へ移行しつつあったので、政府は、明治37年(1904)に内務省令「肺結核予防に関する件」を発し、大正8年(1919)には「結核予防法」を制定して、対策に取り組んだ。

そのような時代背景を考慮に入れると、自然に恵まれた好い環境で過ごさせることによって虚弱体質児の体質改善を図るドイツの試みに影響を受けた試みが、明治時代末期から、各地で夏休みなどの長期休暇を利用して急に盛んになったのも、不思議ではない。そしてそのような試みには、「夏季休養団」(1911年・東京)、「避暑保養所」(1912年・高松、1914年・京都)、「林間学校」(1916年・京都)、「夏季臨海保養所」(1922年・横浜)、「夏季保養団」、「夏季児童保養所」、「林間保養所」(金沢)など、さまざまな呼称が当てられた。日本赤十字石川支部の「夏季児童保養所」の場合は、「腺病質や滲出性体質や虚弱体質の児童」を対象にし、馬場尋常小学校の「夏季保養団」の場合は、「精神的欠陥を有する低能児」も対象にしていたのであるが、この「腺病質や滲出性体質や虚弱体質の児童」や「精神的欠陥を有する低能児」を「精神病患者」に置き換え、「精神病患者」に集団で規則正しい生活をさせ、身体を鍛え、精

神の健康を回復させるところを「精神病者保養所」と呼んだと考えることができるであろう。「夏季保養団」や「夏季児童保養所」が開設され始めたのとほぼ時期を同じくして、「精神病者保養所」が生まれ始めたのは、偶然の一致とは思えない。

(4) 岩倉病院資料を複写し、調べてみると、公立精神科病院の代用病院指定に関する書類が多いことがわかる。代用病院指定が岩倉病院にとって大きな出来事であったからであろう。

(5) その指定は岩倉病院の信用を増し、評判をよくしたと思われる。事実、そのころから岩倉病院の入院患者数は急増している。

(6) ところがその指定の結果、岩倉病院は公費患者を多く受け入れざるを得なくなったようである。そして公費患者に対して行政から支払われるわずかな金でも経営を成立させるため、岩倉病院は岩倉の米、野菜、たきぎなどを使わなくなり、京都市中央卸売市場で買ってくる朝鮮米、野菜を使い、たきぎに関しても、岩倉のたきぎを使わなくなり、京都市で買ってくる石炭を使うようになった。他方、増えた患者の分だけ生活廃水が増えるが、それは岩倉川に垂れ流し。病院の下水が岩倉川に流れ込む場所から下流では、岩倉川がずいぶん汚くなり、異臭がして、住民が川で洗濯などできる状態ではなくなった。しかし川の水が汚くなくても、川の水なしに米作りはできない。岩倉の人は米の等級を落とされてしまい、岩倉の人の間に不満がたまっていた。

ちょうどその頃の昭和3年(1928)に岩倉と京都市の出町柳の間に鞍馬電鉄が開業し、岩倉の人は、精神障害者の受け入れなどに頼らずとも、京都市へ通勤して生活できるようになった。それとともに、岩倉の人は、岩倉に対する風評を京都で耳にするようになった。「私達の少年時代に「あれは岩倉行きや」といえば、狂人を意味していた」(藪田嘉一郎「岩倉考」、『東京と京都』、第五号、白川書院、1960年)。「京都の人は、岩倉行きをあまり好まない。それは東京の人のいう松沢行きと同じように、岩倉には精神病院があるからだ。そのせいもあるのか、岩倉のことはあまり知られてはいない。」(林屋辰三郎『京都』、岩波書店、1962年)というようなことになってきていたのである。その結果、岩倉の人は、精神障害者の受け入れにかかわることを嫌がるようになった。「本村では[岩倉で]看護人になるのを大変嫌い、その職を一段と低く見た。勢ひその職は他村の者がたづさはる事になる。」(明徳国民学校『岩倉の実態』、1942年)と学校の記録にまで書かれるようになったのである。もっとも、京都帝国大学医学部附属病院精神科の看護士には岩倉村出身者が多かったと言われているので、岩倉の人は岩倉の病院や保養所にかかわりたくなかったというだけのことである。

また、患者は農作業の手伝いや家事手伝い

といった仕方で受け入れ側に貢献することもあったが、戦後、機械化の進展により、患者に頼まなければならぬ仕事がなくなってしまったということも、患者受け入れから岩倉の人の心が離れた小さな理由として挙げることができるかもしれない。

このようにして岩倉の人に患者受け入れに対する不満がつのり、そしてまたその不満を口にすることができる状況にもなっていたので、昭和45年頃から、新・岩倉病院の若手医師たちが、開放医療を急激に進め、長い間病室に閉じ込められていた患者たちが住居不法侵入などをしばしば起こした時に、岩倉の住民が病院を批判したことは、少しも不思議ではなかった。

ところが病院は、「開放医療批判は地域エゴである」として、地域住民の訴えを最初は無視した。しかし開放医療では患者が地域に出ていくので、治療の場は病院内に限られることなく地域全体に広がるはずである。たとえばある患者は、自分が昨日買ったものが、今朝の新聞の折り込み広告に特売品として昨日より安く売られているのを見つけ、マーケットへ行き、「(自分が昨日買ったものを)返すから、今日の値段で売って欲しい」と言ったそうである。マーケットの担当者は、病院の地域係に電話をして、「何とかしてほしい」と苦情を言ったのであった。この例からもわかるように、病院は、開放医療を続けて発展させていこうとすれば、地域に存在する病院であることを自覚し、地域に理解を求めるとともに、自らも地域の一員として地域の人に信頼されるような病院になる努力をしなければならぬことにやがて気づくようになった。

病院は、地元と話し合いの場を持ち、昭和60年(1985)に協定を結ぶとともに、地域の清掃活動、下水道の整備、地域の活動への参加、寄付なども行うようになった。

他方、地域住民も、精神科病院批判ばかりしておれなくなった。社会の急激な高齢化に伴って認知症を患う人が増え、家族だけで認知症高齢者や精神障害者などを介護できなくなり、自分が働きに行くために彼らを地域の病院や施設に預けるようになったからである。病院は、介護を必要とする人を受け入れる施設、認知症の人を受け入れる施設を1990年代以降増やしていった。地域住民で、病院やそのような施設で働く人も多く出てくるようになった。患者、地域住民、病院それぞれに得るものがあるという関係になったのではないだろうか。かつて江戸時代から大正時代までの岩倉では、患者、保養所、病院、地域それぞれに得るものがあった。それが一時期そういう関係でなくなったが、最近になって、その互惠関係が新たにできてきたのではないだろうか。

患者が地域で暮らせるようにするべきであるという考えをよく耳にする。岩倉における精神障害者受け入れの長い歴史を見てい

ると、患者が地域で暮らせるようにするために求められているものが何かを考える手掛かりが得られるように思える。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計14件)

____中村治、洛北岩倉と精神医療、二〇一六年度 差別の歴史を考える連続講座講演録、京都部落問題研究資料センター、2017年、55-76、依頼論文なので査読無。

____中村治、精神患う人の岩倉受け入れ、福祉ニュース(障害福祉編)(月間切抜き速報2017年3月号)、2017年、19(新聞記事が掲載されたもの)、新聞記事にする段階で査読有。

____新宮一成、それはなぜラカンによらなければ説明できないのか? 神経症と精神病、臨床精神医学、45巻、2016年、1383-1389、査読有。

____新宮一成、造形と精神分析 意味のかたち、臨床描画研究、31巻、2016年、54-70、査読有。

____新宮一成、言語的なものとそうでないものに関する芸術療法と精神分析の比較構造論、日本芸術療法学会誌、47巻、2016年、29-34、査読有。

____新宮一成、退行期・終末期の精神をめぐって 精神分析と時間、最新精神医学、21巻、2016年、207-212、査読有。

____NAKAMURA, Osamu, Family Care of Mentally Ill Patients in Iwakura, Kyoto, Japan--What Made Family Care of Mentally Ill Patients Possible and What Made It Over, Journal of Psychological Sciences, Betty Jones & Sisters Publishing, 2016, Vol. 2, No. 1, 32-49(全69ページ)、査読有。

____中村治、精神医療にとって歴史とは何か、精神医学史研究、Vol.19, No.1、2015年、22-26、査読有。

____中村治、金沢における精神病者保養所、大阪府立大学紀要、10巻、2015年、87-122、査読無。

____新宮一成、夢について、學士會会報 No.912、2015年、75-78、査読有。

____SHINGU, Kazushige, Transference of Creation: Freudian Bipolarity between Creating and Being Created. Comparative Literature Association of the Republic of China. Newsletter No. 14. 2015, 45-48、査読有。

____新宮一成、精神病理学における脳的なもの、臨床精神病理 Vol.36, No.2、2015年、183-192、査読有。

____新宮一成、「ちいさな幻覚」について、精神分析&人間存在分析、23号、2015年、13-21、査読有。

____新宮一成、日本の文字と無意識の実践、

精神分析&人間存在分析、22 巻、2014 年、29-38、査読有。

〔学会発表〕(計 17 件)

中村治、京都岩倉の精神病患者保養所、第 24 回精神科看護管理研究会、2017 年 2 月 24 日、石川県青少年総合研修センター。

新宮一成、夢の分析はどのようにして神経症の治癒を導くことができるのか?、大阪大学精神科同門会「和風会」、2017 年 2 月 26 日、千里阪急ホテル、大阪市。

SHINGU, Kazushige, My remotest past named hope: A psychoanalytic essay on transmigration in time and space, The 4th World Humanities Forum, 2016 年 10 月 27 日、水原市、韓国。

中村治、南方熊楠・熊弥親子と岩倉、第 20 回日本精神医学史学会、2016 年 11 月 12 日、北野病院 5 階きたのホール、大阪市。

NAKAMURA, Osamu, Mentally ill patients and Iwakura, The 8th Meeting of the Asian Society for the History of Medicine, Taiwan, 30th of September, 2016, Academia Sinica, Taipei, 台湾。

中村治、金沢の精神病患者保養所、第 19 回日本精神医学史学会、2015 年 11 月 7 日、新宿パークタワー 23 階、東京都。

NAKAMURA, Osamu, Family care for mentally ill patients in Iwakura, Kyoto, Japan What made it possible and what made it over , The Third Conference of East Asian Environmental History, 25th of October, 2015, Kagawa University, 高松市。

中村治、岩倉と金沢の精神病患者保養所患者と共生した精神科看護の源流、第 22 回日本精神科看護学術集会専門 in 京都、2015 年 8 月 30 日、京都テルサ、京都市。

NAKAMURA, Osamu, Guesthouses for mentally ill people in Iwakura, Kyoto, Japan and law, 34th International Congress of Law and Mental Health, 16th of July, 2015, Freud University, Vienna, オーストリア。

中村治、保養の形、第 61 回形の文化会フォーラム、2015 年 3 月 21 日、大阪府立大学 B3 棟、堺市。

SHINGU, Kazushige, Delusional Causality in Transference Formation. The 13th Annual Conference of Affiliated Psychoanalytic Workgroups, 22 August 2015. Ghent University, ベルギー。

新宮一成、造形と精神分析。第 25 回日本描画テスト・描画療法学会、2015 年 9 月 5 日、大正大学、東京都。

SHINGU, Kazushige, Réflexions sur les points de fixation : là où vivent la psyché, et le soma. Colloque médical franco-japonais 2015, 24 Octobre 2015, La Maison franco-japonais de Tokyo, 東京都。

中村治、精神医療にとって歴史とは何か 洛北岩倉の場合(シンポジウム「精神医学にとって歴史とは何か」) 第 18 回日本精神医学史学会、2014 年 11 月 8 日、京都大学時計台ホール、京都市。

中村治、地域と精神障害者 洛北岩倉の場合を通じて、京都生命倫理研究会、2014 年 6 月 14 日、立命館大学朱雀キャンパス 3 階 304、京都市。

新宮一成、精神医学の歴史における精神分析 - 働き続ける痕跡として、第 18 回日本精神医学史学会、2014 年 11 月 8 日、京都大学百周年時計台記念館、京都市。

新宮一成、精神病理学における脳的なもの、第 37 回日本精神病理学会、2014 年 10 月 4 日、東京藝術大学、東京都。

〔図書〕(計 2 件)

NAKAMURA, Osamu, Patient Work and Family Care at Iwakura, Japan, c. 1799-1970, in Ernst Waltraud ed. Work, psychiatry and society, c.1750-2010, Manchester University Press, 2016, 378 (182-193)。

新宮一成、岡田彩希子著『表現する「私」はどのように生まれるのか』への解説、2017 年、ミネルヴァ書房、199-212。

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中村 治 (NAKAMURA, Osamu)
大阪府立大学・人間社会システム科学研究科・教授

研究者番号：10189029

(2)研究分担者

新宮 一成 (SHINGU, kazushige)

奈良大学・社会学部・教授

研究者番号： 2 0 1 4 4 4 0 4

(3)連携研究者

()

研究者番号：

(4)研究協力者

()